

# Music

## ジョニ・ミッチェルの『ブルー』とエーゲ海

Text: George Cockle  
文/ジョージ・カックル



欲しいものが手に入らない時、妥協して違うものを買ってしまうことがある。俺は中学の頃、当時発売されたジョニ・ミッチェルのアルバムがどうしても欲しかった。だが、当時住んでいた韓国ではその『レディース・オブ・ザ・キャニオン』は手に入らなかった。韓国の米軍キャンプにあったPXのレコード屋では数自体が少なかったの、欲しいものがあつたらすぐには買わなければ二度と巡り合えない。オーダーもできないしね。あげくの果てに、韓国では洋楽のレコードは質が悪い海賊版のベストしか売っていなかった。つまり、俺はそのアルバムを手にするにはできなかったんだ。そして翌年、高校生になった俺は、ジョニの新作アルバム『ブルー』がキャンプのレコード屋に入荷したという噂を聞いて、すぐに飛んで行って手に入れた。

しかし聴いて見ると、最初はがっかりした。ヒット曲は一つも入っていない、良く言えばわりと落ち着いたアルバムだった。使っている楽器は少なく、ほとんどの曲は大人の恋愛が旅の話。中学生の僕にはまだ理解できなかった。でも当時はお金がないから、アルバムもあまり買えないし、そんなに持っているアルバムがないので、よく聞く

ようになっていった。そして次第に彼女のスタイルになじみはじめ、そのアルバムを好きになっていった。

それから何年か経ってからのことだが、僕はバックパックで長い旅に出た。初秋の頃、インドからバスと列車とトラックを乗り継いで、パキスタン、アフガニスタン、イラン、トルコを旅し、そしてギリシャにたどり着いた。アテネの港ピレウスから船に乗って南のクレタ島に行った。今まで見たこともない青い海の旅だった。いくつかの島に寄ったが、俺は目的地まで降りなかった。そこに行った理由は暖かいから、本当にそれだけだった。そのクレタ島でヒッチハイクをしていたら、バックパッカーから面白い話を聞いた。ジョニのアルバム『ブルー』の歌詞に出てくる村はこの島にあるってね。面白い話だと思い、俺はその村までの行き方を聞いて行ってみた。そのアルバムの曲や歌詞を思い出しながら、胸を高鳴らせて向かった。村の名前はマタラ。彼女の曲の中にはマタラの月が出てきた。そこにあるマーメイドカフェという海沿いのカフェで踊ったという歌詞もあった。マタラはクレタ島の南側にあった。山から海まで下りて行く山道の下に小さい湾があり、その一角だ。ただ

り着いたときは嬉しかった。自分がよく聴いていたアルバムの中の風景が、実際にあるなんて夢のようだね。小さな漁師の村、でもあまりロケーションが良くて、当時はバックパッカーの観光地にもなっていた。きっとジョニが行った時もそうだっただろう。そこにはマーメイドカフェもあった。でも俺みたいな金がないバックパッカーは、一杯だけ飲んで、それからは外で安いワインを口にするしかなかった。しかしながら、『ブルー』というアルバムは全体を通してエーゲ海を旅するにはちょうどいい、穏やかな海をイメージさせる仕上がりになっている。

今はもう『レディース・オブ・ザ・キャニオン』も持っているが、やはり『ブルー』の方をたくさん聞いている。旅の思い出もあるからかもしれない。だが、もしも『レディース・オブ・ザ・キャニオン』にはまっていたら、カリフォルニアに行ったのかもしれない。そう思うと、やっぱり巡り合わせておもしろい。



ジョージ・カックル ● 60～70年代のロックに精通し、ラジオ・パーソナリティとしてインターFMや東京FMで活躍中。鎌倉出身・在住。波乗り歴38年の親父サーファー。  
[www.whatsupmusicinc.com](http://www.whatsupmusicinc.com)